
彼氏が料理を作るわけ

かかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼氏が料理を作るわけ

【Zコード】

Z8046Z

【作者名】

かかし

【あらすじ】

料理が作れないはずの彼が、わたしのマンションに来て、突然、料理を作り始めた。果たしてそのわけは？

毎週^{一回}必ず喧嘩から電話があった。

「今から行くから」

それだけ言^うと、すぐに切られた。

素つ氣無い電話。

ほとんどの土曜の夜は一緒に過ごす。電話が来て、喧嘩がわたしのマンションにやってくる。今みたいに。もしくは、わたしが押しかける。今日は土曜日。いつもとなんら変わらない。

声の雰囲気が違つてたような気がする。氣のせいかも知れない。そうに違ひない。心にやましいところがあるから、そんなふうに聞こえただけだ……

二十六歳から付き合い始めたもうすぐ一年、奴が来るからつて、ドキドキするような時期はとうとう過ぎてこる。多分、これはストレスの動悸である。

三日前の水曜日。良いワインが手に入つたと、喧嘩からメールがあつた。わたしは仕事帰りにチーズと、フランスパンと、サラダと、さきいかと、カップラーメンを買って喧嘩のマンションに行つた。

シャルドネの何とかという白ワインと、ブルゴーニュのなんたらかんたらという畠で作った赤ワインだそうだ。わたしにはよく分からぬ。喧嘩はその畠の歴史や、ブドウの品種についての謹蓄を語り始めたが、それを遮り、とりあえず乾杯と、勝手にオープナーで白ワインのコルクを抜く。これがなかなか口当たりもよく、クイクイいつてしまつ。瞬く間に一本空けてしまい、次は赤ワイン。少々渋みがきついたが、チーズとあわせるとこれはこれでよい。それを飲み終わり、さきいかをつまみに焼酎をロックで飲み始めたあたりから、記憶が怪しくなつてくる。

啓斗は酒豪で、酒癖はよいし、とにかく強い。乱れるといふことがない。

わたしはとくと、父親も母親も共に酒乱の家系。どちらの親類の新年会に参加しても、毎年大荒れである。特に母親のからみ酒は目を覆いたくなる代物で、身内の間でも母にはあまり酒を勧めないのが暗黙の了解になつていて。

悲しいかなわたしの酒癖は母親似らしい。さうに、記憶がなくなるから始末が悪い。まったく忘れてしまえば、すべてを闇に葬れるのだが、ときたま、暴れている自分の姿がフラッシュバックする。部長のハゲ頭にヘッドロックをしているシーンはわたしのトラウマだ。ただ、誰もそのことに触れないし、わたしも確かめられないでいる。单なる夢であつて欲しいと、切に願つている。

先日は、三杯目のお酒を作つたところまでで、以降の記憶がない。酒癖が悪いことは重々承知しているので、気をつけはいるのだが、たまにしでかしてしまう。

朝、ベッドから一日酔いの頭をもたげると、啓斗の姿はすでになかつた。奴のほうが出勤時間が早いので先に出かけたらしい。

泊まつてしまつのは日常茶飯事で、着替えも置いてある。鍵も持つていて。一緒に起きよつと心がけてはいるのだが、六割くらいの確立で失敗する。なので、啓斗が一人で出ていつてしまつたこと自体は、気に病むほどのことではない。

しかし、朝の啓斗の表情を確認できなかつたのは失敗だった。それによつて、何かやつてしまつたのか、何もなかつたのか、おおよその見当は付けられたのに。少なくとも、怒つているのかどうかくらいは確かめておくべきだつた。

その後、啓斗から電話はなかつた。こつちも、まあ、そのままにしておいた。そして、先ほどの電話だ。もうすぐ奴はやつてくる。はあー。気が重い……

午後四時過ぎにわたしのマンションのチャイムが鳴った。ドアを開けるとそこには汗まみれの啓斗が立っている。

「よおっつ」わたしはさり気なく言った。

左肩にいつものショルダーバック、右手にスーパーの袋をさげている。九月に入ったとはいえ、このところの残暑は半端ではない。顔を真っ赤にした啓斗が、熱風と共に押し寄せてきた。

啓斗は身長が百八十センチ、ずうたいがでかい。見ているだけで暑苦しくなる。高校、大学とラグビー部で主将を務めていたらしいが、見た目のわりに性格は温厚である。ただし、気に入らないことがあつたり、緊張したりすると何も喋らなくなる。喧嘩になつたときも、最終的には、「男の癖にウジウジすんな!」という、わたしの逆切れで終わることが多い。

「まつ、熱いねえ。入りなさいな」普段わたしはどんな話し方してたっけ?

啓斗はドアの前で突つ立つて、持つている袋を覗き込む。「ん? なんじやこりや!」

ちなみに言つておくが、わたしは料理を作らない。作れないのではなく、作らないのだ! 才能がないのではなく、必要がないのだ!

! みたいなことを今まで散々言つてきたが、最近ではどうでもよくなつてきてている

母にはそんなことだから貰い手がないんだと言われる。別にまだまだあせる年もあるまい。料理上手の男を見つけるからいいよ、なんてうそぶいていたが、来月に誕生日をひかえ、やや自信を失いかけてしている。

まあ、そんなことはどうでもよいのだ

だから、啓斗が来たときは、外に食べに行くか、弁当を買つてくるか、デリバリーを頼むかの三択になる。啓斗は一歳年下なのだが、もちろん料理を作るような才覚は持ち合わせていない。ただ、意

外に気が利く。だから、スーパーの袋を見たときに、当然弁当を買ってきたのだと、疑いもしなかった。

今日はハンバーグ弁当の気分かな、なんて覗いてみると、中に
は玉ねぎや、キュウリ。肉？ どうすんじゃ、これ？

「約束どおり、料理作るからなー。」

突然、何てことを言い出すのだ。わたしは動搖する。もちろん、約束なんて覚えていいわけがない。

啓斗は靴を脱ぐと、田の前にあるキッチンに向かった。指揮者が指揮台に向かうときのような表情をしてくる。じんよじとした空気が漂っている。ん？

わたしの部屋は1LDKの賃貸マンションで、入口を入ったところが、六畳のダイニング・キッチンになつていて、その奥に八畳の部屋がある。キッチンは入口の並びにあるので、奥の部屋に背を向ける形で料理をするよみになる。

啓斗は「できるまで、そっちの部屋で待つて」と言い放つと、わたしをダイニング・キッチンから追い出した。普段ならそんな言葉に従うことはないのだが、今回はとりあえず反撃せず、様子を見ることにした。

啓斗はわたしに背を向けると、黙々と作業を始める。料理など作つたことはないと言つていたのは本当らしい。手際が悪い。果然とキッチンの前に立ち尽くし、やつと何かを始めたかと思うと、そのままの形でしばらく固まつていて、少し動くと、またすぐに止まる。接続の悪いインターネットの動画サイトを見ているようだ、イライラする。

「ひつやつひ、啓斗の後姿ずっと見てるといつて、ないよね。隣にいたり、向かいあってたり、一緒にねてることはあるけどさ。何かちょっと新鮮だよ

やることもないの、冷蔵庫にビールを取りに行きながら、探しを入れてみる が、黙殺される。

機嫌が良いのか悪いのかさえ把握できない。状況はかんばしくない。いや、最悪に近い。

約束つていつたいなんなのだろう。

これには三つのパターンが考えられる。

今度、俺が料理作つてやるよ、という見返りを求める一方的な約束。わたしがすでに何かをしてあげていて、そのお返しとして、約束を履行しているパターン。もう一つが、俺は約束を守るのだから、お前も約束守れよな！ 的なパターン。

どう考へても、啓斗の雰囲気からして、第三のパターンにしか思えない。というか、確信をもつて言える。この気配は、確実にわたしが何かすることを求めている。

わたしは戦々恐々としながら、怯える子羊のよつて、ビールを片手にテレビを観ていた。

テレビを観ながら、横目でチラチラと啓斗の様子を伺う。

こうやって、男がわたしのために必死に何かをしている姿を、ビールを飲みながら眺めるのも悪くない。なんて、悠長なことを考へ始める。わたしは酒が入ると、気が大きくなる。何でもよくなってしまう。これが失敗の元凶だ。男が料理中の女を後ろから羽交い絞めにしたり、裸エプロンなんつもに憧れる気持ちも、なんとなく分かるような気がしてきた。

「イテツ」

啓斗が左手の中指を押さえている。どうやら指を切つたらしい。

「大丈夫か？ 見せてごらん」

啓斗は素直にわたしの元へやつてくる。

見ると、それほど深い傷ではないが、指先から血が流れている。

絨毯に、今にも血が滴り落ちそうだった。わたしは思わず、その指を口の中に入れ、傷口を吸つた。啓斗の血の味がした。鉄っぽい臭いがして、なんだか啓斗を食べてるみたいで、恥ずかしい。

啓斗の身体の一部を、わたしの内臓が消化・吸収し、やがて全身の細胞に拡散して、わたしの身体の一部となるのだ、なんて想像していたら、少し興奮した。強く傷を吸つたら、啓斗が顔を歪めた。

わたしは絆創膏を啓斗の指先に巻いてやつた。ついでに啓斗の唇にキスをした。このまま押し倒してしまおうかと思ったが、キッシュで何かがグツグツと音をたてている。とりあえず料理っぽい、いい匂いがってきて、お腹がグーッと鳴つた。一本目のビールのブルトップを開け、「飯まだかあーー！」いつちょうど気合を入れてやつた。

わたしは”うつ氣”が強いのかもしれない。血を見ると興奮するし、痛みに耐えてる男の顔もなかなか良い。悪いことに、啓斗もどちらかとこうと”う”だ。セックスの最中に、ときどき変なことを言い出したり、してきたりする。当然、わたしはその倍返しで応酬する。それがお互いの抑止力となり、おかげでノーマルな関係を維持できている。

ちょっと前の話になるが、啓斗が、あらうことかわたしの尻の穴に入れたがつたことがある。そんな趣味はないし、痔になるのも嫌なのでキッパリ断つた。

もしかすると、今回の約束も、そういうた類の話だつたような気がする。ん？なんか、入れるとか入れないと、ケツがどうとか、言ってたような気がする。んん？？なんか、そんな約束してたような気がする

なんてこつたあ……」りやあ、本気でまずいぞ。

料理が出来上がつたらしい。啓斗がダイニングのテーブルに皿を

並べて いる。

「どうぞ」

待ちかねて いた。飲みかけのビールを片手に、テーブルに座る。

「スパゲッティーにすき焼きとは変わった組み合わせだねえ」

「これ、肉じゃがのつもりだつたんだけどな」

「肉じゃがつて、ジャガイモ入つてないじゃん」

「「めん、買ひ忘れちゃつて……」

「……」

とりあえず、シャンパンで乾杯する。これつて、けつこう高いやつじゃなかつたつけ？

スパゲッティーは多分、ボロネーゼとかミートソースとかいわれているものを、意識したのだと思われる。端的にいえば、ひき肉を大量のケチャップで炒めただけの代物だ。啓斗の認識では、ミートソースというのはそういうものなのだろう。まあ、わたしもどこが違うのかよく分からぬいが……

食べてみる。これがなかなか美味しい。甘めのケチャップの味と、芳ばしい（多分これは本当に焦がしてしまつたのだろうが）香り。スパゲッティーはアルデンテからほど遠く、クッタリと茹で上がつていたが、これはこれで哀愁が漂う、なんともいえないクッタリ加減である。ミートソースとナポリタン・スパゲッティーのいいとこ取りをしたようで、まったく美味しい。

肉じゃがはジャガイモは入つていなが、肉は金に糸目をつけなかつたのだろう。最上級黒毛和牛の霜降り肉が使われている。味付けはやや薄めだが、すき焼きと思えば十分いける。というか、こんないい肉を使っていて、まずいわけがない。本当は溶き卵につけて食べたいくらいだったが、肉じゃがだと言い張る啓斗の手前、それは我慢しておいた。

「うーん。オヌシなかなかやるのう。美味しいよ
啓斗は、恥ずかしそうにうつむいている。

「約束は守つてもううつよ」

やつぱりきましたかあ。分かったよ。覚悟はできてるよ。

啓斗は立ち上ると、おもむろに自分のバックを持ってくる。バックを開き、中から何かを取り出そうとしている。

まつ、まさか、道具を使うことは「じつ、じめん、そこまでは心の準備ができていない。想定の範囲を超えている。これはまずことになつた。ロープとか蠅燭とか、まさか浣腸まではさすがないだろう。このアパート壁が薄いから、あんまり変なことすると隣の人に聞こえちゃう。そういえば、昔、おばさんに嫌味つぽいこと言わされたことがある。でも、約束したなら多少のことは我慢しないといけないのか？　ビツするかあ？　ビツする、ビツするんだ、わたし！

啓斗はカバンから、思いのほか小さな箱を取り出す。中身を見せられる。

あまりにも唐突で、一瞬、意味が把握できなかつた。

こんなのでグリグリされたら相当に痛いぞ！　ところが、悲しいかな、わたしの最初の印象だつた。

中には「ゴシゴシとした、ダイヤの指輪が入つていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8046n/>

彼氏が料理を作るわけ

2010年10月8日13時48分発行